



平兵衛は  
過去を  
夢見る 2

HIRABEWEI WA  
KAKO WO YOMIBIRU

丘野優  
Yu Okano

# 目次

本編 7

番外編 映像水晶ができるまで  
237

## モラード・ガラクルシア

魔法使いと呼ばれる偉大な魔術師。  
ジョンのクラスの魔法実技を  
担当している。

## トリス・メルメディア

膨大な魔力量と年齢不相応の  
美貌を誇る、黒貴種の少女。

## フィー・ドルガンティア

ドワーフ  
匠種の僕っ娘。  
種族特有の怪力と幼い外見が特徴。

## ブルバツハ

学術都市ソステスーで  
最高位の研究者。  
前世でも今世でも、数々の奇怪な  
魔導具をジョンに与える。

## ノール・オルフル

ジョンと同じ風のクラスの生徒。  
平民ながら高い潜在能力を持つ。

## ベルノー

数々の修羅場を  
乗り越えてきた迷宮探索者。  
現在は魔法学院で  
迷宮関係の科目を教える。

## ローゼンハイム・ナコルル

前世における大英雄の一人で、  
現在は魔法学院の学院長。  
本来は匠種だが、公の場では  
貴種の姿をとる。

## ジョン・セリアス

本作の主人公。勇者が魔王を  
討伐した直後に死亡、なぜか  
赤ん坊から人生をやり直すことに。

## ファレーナ

闇の気配を漂わせた、  
人ならざる美少女。  
前世からの因縁でジョンに力を貸す。

## 第1話 始まりの夢

神に、祈っていた。

この世界を創り出したという創世の神に。

手を組み、ひざまずいて、ただひたすら、俺は神に祈った。

あなたはなぜ、こんなことをするのかと。

あなたはどうして、この世に痛みと苦しみなどというものを創り出してしまったのかと。

しかし、いくら尋ねても、誰も応えない。

魔王討伐軍の礼拝用天幕の中では、静かにゆらゆらと、蜜蝋で作られた蠟燭ろうそくの火が燃えているだけだ。

だから俺は祈りの内容を変える。

友よ、どうか安らかにと。

そう祈って、俺は立ち上がった。

「……お祈りは、もう終わりましたの？」

すると背後から、少女の高い声が聞こえた。

こんな、戦争の最前線にある天幕になど似つかわしくない、汚れを知らぬ美しい声が。

その声にはしかし、聞き覚えがあった。

そしてそれが今一番聞きたかったと同時に、一番聞きたくなかった声であることを、俺は脳裏に焼き付いた強烈な記憶と共に思い出す。

なぜ、君がここに。

声に出たのだろうか。出たとしても、きっと引きつっていただろう。俺は彼女の顔を、まともに見られる気がしなかった。

俺は、奪ったから。

彼女が大切にしていたものを、奪ったから。

「……なぜ、と言われましても。遺体を引き取らねばなりませんもの。父は別の地域で魔族と戦っておりまして、どうしても来られませんの。家族として、妹として、私が参らねばとの思いでここまで来ました。それに、どうしてかしら。私、あなたに会いたかったのですわ、ジョン……」

そう言って、親友ケルケイ口の妹——ティアナは、ぼふり、と俺の胸の中に飛び込んできた。

本来美しく波打っているはずの金の髪は、よほど急いでここまで来たのだろう、普段の美しさを

ど見る影もなくぼさぼさになっている。着ている服も、上等なものなのだろうが、土と泥と血で汚れていて、無惨なものだ。そうだ。彼女はかなり後方にいたはずだ。ここまで来るのに、無傷でいられたわけがない。この血は彼女のものか、それとも彼女の護衛のものか。魔物や魔族との交戦を経て、こんな風になったのだろう。はっと気付いて彼女の身体に傷がないかを確かめるが、どうやら見える場所にはないようで、少し安心する。

「……よかった」

そんな言葉が、俺の口から出た。ケルケイ口を失い、彼女まで失ったら、俺は何を守ればいいのだろう。先ほどまで絶望と憎しみに染まっていた心が、彼女の顔を見て、少しずつ解れてきた気がする。それが果たして許されることなのかは分からない。けれど、俺にはまだ彼女がいる。そのことだけが、俺のこの世への縁となってくれているように思えた。

そのとき、俺の表情は多少、柔らかくなったのかもしれない。

俺の胸の中で小さく顔を上げたティアナは、まっすぐに俺の目を見つめて、それからまた少し顔を伏せ、話し出す。沈鬱だが、決して俺を攻撃するような声ではなかった。彼女は、俺のことを恨んではないようだった。俺が一番恐れていたことは、現実にはならなかったらしい。

ティアナはそんな俺の心を知ってか知らずか、悲しそうに、だが励ますように言った。

「お兄さまのこと……自分を責めにならないでください」

「……だが、ケルケイ口は俺のせいだ……」

「違います！」

ティアナは顔を上げて、俺のことを強く抱きしめて言った。

目には少し涙が滲んでいて、額を俺の胸につけると同時に一筋の滴が流れ落ちる。

「……違います……お兄さまは、ジョンにそんな風に自分のことで苦しんでほしいなどと思っ  
ては  
いませんわ！ お兄さまは……きつと、覚悟の上で、ジョンについていたのです……私、分か  
ります。だって、私もお兄さまも、ジョン、あなたのことが大好きなのですから……あなたのため  
に、何を捨てても構わないと、そんな風に思えるほどに、大好きなのですから……」

「でも……だったら、俺は、何をすればいい。俺はあいつのために、何をすれば……俺は……」  
ケルケイ口はもういない。

魔族に首を飛ばされ、そして死んだのだ。

俺が何も考えないでタロス村に舞戻ったせいで、俺の無謀のせいだ。

そんな俺があいつに何をしてくれる。

あいつの死後の世界での安寧を祈り、またこの世で自分を責め続けて生きることしか、俺には許  
されていないのではないか。

そうでないとするなら、俺に許されるのはなんだというのか。

噛みしめた唇に、血が滲んでいく。

目頭が、熱くなる。これは一体、何の涙なのだろう。悲しいのか、苦しいのか、悔しいのか、辛  
いのか。分からない。俺には何も……

そんな俺の頬を、ティアナは優しく包んだ。

それから、涙を拭い、顔を近づけてくる。

彼女は俺の唇に滲んだ血を舐め、それから優しく口づけた。

ゆっくりと離れていくとき、彼女の顔は泣き笑いのような表情をしていた。

「……きつと、幸せになること、ですわ」

「そんなこと……許されるはずが」

「ジョン、あなたは何のために戦ってきたのですか。これから何のために戦うのですか。なぜ魔族  
を殲滅し、魔王を滅ぼそうとしているのですか。そのことを、あなたは決して忘れてはならないは  
ずです」

「何の、ために……」

「昔……あなたは言っていましたわ。お父様のような兵士になって、みんなの幸せを守るんだって。  
ねえ、ジョン。あなたにするべきことは、幸せを守ることなのですわ。昔も今も、それは変わりま  
せんわ……」

確かに、そんなことを言った記憶がある。

俺はずっと親父のようになりたかった。それは親父が強いからだけじゃない。親父は、守る兵士だったからだ。魔の森の侵食から国を守り、ひいては国に住む人々の生活を、小さな幸せを守る、そんな兵士だったからだ。

だから俺は、ケルケイロとティアナとお茶を飲んでいたある日、どうして兵士を目指しているのかと訊かれたときも、こう答えた。

「俺は、親父みたいな兵士になりたい。みんなの幸せを守れるような兵士になりたい」と。それを、ティアナは覚えていたのだろう。

あんなつまらない話を、この少女は真面目に聞いていてくれたのだ。会って間もなかった、俺みたいな平民の話を、真剣に。

「……私、あのとき思いましたわ。きつと、この方は立派な兵士になるのだわって。この国の兵士全てが、この方のような志を持っていてくれたら、いいのにな……思えば、私はあのときから、あなたのことが……」

「ティアナ……」

名前を呼ぶと、びくり、とティアナは肩を震わせる。

それから、彼女は目をつぶり、こちらを見上げてきた。

俺は彼女の顔にゆっくりと自分の顔を寄せていき……



がばり、と俺は目を覚ました。

辺りを見渡すと、そこには揃いのローブを身に纏った少年少女の姿が見える。

その向こう側には正装した教員たちが立っており、正面の壇上では魔法学院の院長であるナコルが、新人生に向かつて学園生活の心得を延々と語っている。

その姿は生来のドワーフとしてのもではなく、エルフに変身した状態であり、非常に美しく威厳がある。ほとんど詐欺である。

そんな光景の広がっているこは、魔法学院の講堂。

今日は、念願の魔法学院の入学式である。

そして俺はそんな入学式の最中に、盛大に居眠りをしてしまったわけである。神聖な式にもかかわらず仕出かしてしまい、大変申し訳ない。しかもその間に見た夢の内容が内容だった。

少し前までは、身体が子供だったからか、恋心と呼ぶべきものを強く感じることはあまりなかったし、前世での感覚もうまく思い出せず、恋とはどういうものだったのかすっかり忘れていた。

けれど、最近、どこことなく、その恋心、らしきものを顕著に感じるようになっていた。たしかこういうものだったような、なんて気がする、前世の記憶もその感覚が正しいと告げている。

だからだろう。そういう夢を見ることも増えてきた。先ほどの夢も、その一つである。今考えると、戦争の最中に俺は何をやったんだという気がしないでもない。だが、死の危険に毎日さらされていると、それまで恋愛事に対して感じていた躊躇の一切が取り払われて、素直な心を吐露できるようになってしまふのだ。

だから、戦争中はむしろ普段よりもカップルが上がる確率と頻度が高かった。

さすがに戦争後半になってくると、そもそも人口が減ったり、そんなことをする余裕が完全に消滅してしまったりして、恋愛どころではなくなっていたところもあった。それでも少なからずカップルは生まれたし、軍の奴らはそういう者を祝福した。

それが人間として当然の営みであり、そして俺たちにあるはずの「未来」というものを感じさせてくれることだったからだ。

新しいカップルができる度、俺たちはそいつらの未来を切り開いてやらなければという決意を新たにし、それを力にして戦えた。俺たちの戦いが、人類の未来に繋がっているのだと信じられた。

そういった色々なものが、きっとあの頃の俺たちを支えていた。

そんな物思いに耽っていると、どうやらナコルルの長い話が終わったようである。壇上から降りていくナコルルの姿が見えた。一瞬、こちらに視線を向けたような気がするが、気のせいだろう。それから、次に壇上でスピーチをする人間の姿を見ようと、俺は首を伸ばした。

けれど、誰もそこには上がらない。

不思議に思っつきよるきよろしていると、拡声魔道具から、ナコルルの声が聞こえてきた。どうやら、式次第を読み上げているらしい。

「……では次に、入学生を代表する挨拶、首席フラー・エルミステール、壇上へ」

ああ、そういう名前の人が首席なのか……と、ぼんやりとナコルルの声を聴く。ここで言う首席とは、つまり魔力量の最も大きい者のことなのだろう。筆記試験も実技試験もなかったし、それ以外で判断しようがない。

前世で受けた一般兵士の採用試験では、戦闘の実技と、王国法の理解が試される筆記があり、順位をつけられた。

魔法学院で勉強をしていけば、そのうち、同じように順位をつけられたりするのだろうか……  
これからの学園生活を楽しみにしつつ、俺はそんな風にぼんやりと入学式を過ごした。



## 第2話 魔法体系とクラスメイト

「諸君は魔術師となるために、この魔法学院に來た。必然、魔法というものについて、あらゆる側面から学ぶことになる。そのための第一歩として、魔法とは何かを学ばなければならない……」

教室の壇上では、教師が滔々とたごと魔法について語っている。

魔法学院での初めての授業。

それは魔法学概論、という座学である。

この魔法学院においては様々な授業が開講されており、生徒はそれらの中から自ら選択して魔法を学んでいくことになる。しかし例外として必修の科目もあり、この魔法学概論はそのうちの一つであった。

魔法学院に通う生徒は誰であれ、国に役立つ魔術師になるためにここにいるのだから、魔術師として必要なものは必ず身につけさせられる。魔法に関する知識は、魔法を行使するのに必要不可欠なわけではない。しかしたとえば他の魔術師と戦うに当たって、相手の使用する魔法がどのようなものなのかを即座に理解できるかどうかは、勝率に深く関係する。

この時代では、様々な魔法が混在しており、理論体系すら整理されていない。言うなれば、あるものはある、と理解されている。そのため、魔法の知識とは言っても、こういう魔法が存在する、というレベルでしかなく、どのような理由で発動するのかという点については、ないがしろにされがちである。

学術都市ソステナーに行けば少しは違う意見が聞けるかもしれないが、魔法学院においてはこうした考え方がスタンダードだ。そのため、今教壇に立つ教師の説明も、それに準じたものだった。

いわく、魔法にはいくつかの種類が存在し、まずほとんどの人間に使用可能な生活魔法、魔術師の火力の基本となる属性魔法、そしてそれ以外の特殊魔法が存在する。特殊魔法とひと括りにしてしまっているが、そこに含まれる魔法は膨大で、一言で説明しきるのは難しい。召喚系の魔法も魔物の使う魔法も、それぞれこの特殊魔法のひとつと言える。呪術や儀式を必要とする魔力行使方法も同じく特殊魔法に分類されるだろう。

このように、この時代の魔法分類はかなり適当なもので、各魔法の特徴を捉えきれていない。

けれど全くの無意味というわけでもなく、ラベルを貼ってこのような傾向のある魔法だと理解しておけば、やはり他の魔術師と戦うときには有効な情報となる。相手の使う魔法が属性魔法の中の土属性魔法であると分かれば、対抗するには風属性魔法が適切だろうと理解できる、といった具合だ。

まあそれが分かったところで、この時代においては術者にその属性の適性がなければ使えない（とされている）。具体的に何ができるとも限らないのだが、とにかく選択肢は増える。絶対勝てない相手に、無謀な戦いを挑む羽目に陥ることぐらいいは避けられるだろう。

ところで、魔法学院のクラス編成は成績別になされる。この場合の成績とは、魔法の行使能力の高さ以外に、頭脳や運動能力も加味した総合判断の結果だ。そして入学したばかりで成績がまだ不明な今の時期は、ランダムに生徒が割り振られることとなる。

そういうわけで、俺はタロス村から一緒に来たテッドをはじめとする幼なじみたちとは別のクラスになってしまっていた。

周りを見れば、様々な子供がいる。

一クラス三十人程度、年齢は結構ばらばらで、俺と同じくまだ七歳ぐらいの幼い子供もいれば、十二、三歳とおぼしき者もいる。授業の理解に差が出そうだが、魔術師の適性が開花するタイミンがばらばらである以上、これはもう仕方のないことだろう。理解に差が出た分は、成績別のクラス編成を行うことよって乗り切るつもりなのだと思われる。

「……では、君。ええと、ジョン。魔法とは何か、答えなさい」

唐突に教師に指名され、俺は驚きつつも立ち上がり、答える。

「生物が魔力を使うと起きる現象のこと……と思います」

たしか、厳密にはそういう定義だったはずだ。

俺の回答を聞いた教師は、満足そうに頷いて座るように言った。俺は安心して元通り腰掛ける。教師は続けた。

「今、ジョンが説明してくれた通り、魔法とは、何らかの生物が魔力を使用したことよって起きる現象を指す。では、自然魔力が寄り集まった結果起きる現象——有名なところでは、『ミルラの妖精郷幻想』などがあるが、これらは『魔力災害』と呼ばれる。島全体が浮遊しているロンド浮遊島の仕組みも、その意味では魔力災害だと言える……」

ミルラの妖精郷幻想というのは、高濃度の魔力が特定の場所に集まったとき、そこに人間が足を踏み入れると幻覚が見える現象を指している。ミルラという人物がこの現象を観測し、そこで多くの妖精とその妖精の作る都の姿を幻視したために、こう名づけられたそうだ。ミルラがこの体験を書いた本をもとに彼の旅の足取りを追った者が、おそらくミルラは高濃度の魔力汚染地域に足を踏み入れたのだと結論づけたため、この現象が有名になった。

そんな風にして、教師は魔法と魔力というものについて、具体例をあげながら詳しく分かりやすく説明を続け、やがて授業は終わった。

クラスメイトたちに理解できていたかどうかは分からないが、なんとなく魔法というものについ

て親近感が湧いてきたことだろう。

そしてこの後には、魔法実技の授業がある。

魔法について説明し、理解させたあとで、改めて魔法が使用される様子を見せる。それによって魔法に対する強い興味と関心を抱かせていく。それが魔法学院の教育方法なのだろう。

実際、みんな早く魔法を使ってみたいとわくわくしており、それぞれ魔力触媒を持って目をきらきらと輝かせている。魔法の使用を補助する杖や指輪といった魔力触媒は、自前の物を持つ者もいれば、学院から支給されたものを持っている者もいる。魔力触媒はそれなりに高価であり、おいそれと買えるものではない。そのため、平民出身者は学院から支給された魔力触媒を使い、貴族は親に買ってもらったものを使うという傾向が強い。

もちろん、平民でも魔力触媒を持つ者はいる。親が裕福な商家の場合などだ。逆に貴族でも支給された魔力触媒を使う者もいる。いわゆる貧乏貴族という奴だ。

そんなわけで、自前の魔力触媒を持つ持たないは、平民と貴族の間にそれほど大きな溝を生む問題ではない。俺も、それにテッドたちも親から渡された魔力触媒を持っているから、もし問題になるようなら使用を取りやめる他なかった。せつかくももらったものだし、使い込んでやりたいと思っただけに、使用できると分かかってほっとしていた。

「うわ、ジョンは自前なんだな、魔力触媒」

次の授業の行われる学院内の闘技場に向かおうと、触媒である杖を持って教室を出ようとしたとき、隣に座っていたクラスメイトのノール・オルフルが驚きの声を上げた。

「ああ、親から餞別せいはつにもらったんだよ」

「餞別か……いいなあ。俺もいつかそういうかっこいいのほしいぜ」

ノールは、背の高い、赤髪の精悍せいけんな少年である。言うことを聞かなそうな目と顔立ちが特徴的なまさにいたずらっ子と呼ぶべき印象の少年なのだが、見た目と異なり意外とマメな性格らしい。とにかく接点を持つとうとしてか、彼は俺に対してだけでなく、クラスのほとんどの人間に積極的に話しかけていた。

「自分で買えるようになるには、相当稼がないと無理だと思っけどな。お前、将来は？」  
この年で将来も何もないかもしれないが、一応聞いてみる。

「うーん……分かんないよ。だけど、王国騎士には憧れるな。やつぱり花形だろ？」

王国騎士とは、王国を守る四方騎士団を筆頭とする、王国十五騎士団のことである。これに近衛騎士団も併せて十六騎士団という場合もあるが、まあ今はそれはいい。この騎士団は、王国の中でも選良と言われ、年頃の男の子に人気の職業第一位の座を何年、何十年も維持し続けている。構成員には、純粋な剣士もいるが、魔法を行使できる魔法戦士や、魔術師なども在籍しており、たとえば魔術師だろうと騎士の名をいただける。

「だったらかなり頑張らないとだめだろうな……」

「おう。これから死ぬ気でやって、いつか入るんだ。そしたら、家族も楽ができるだろうしな……  
それで、お前は？ ジョン」

ノールは自分の決意を述べてから、俺に顔を向ける。

「俺？ 俺は兵士だよ。できれば魔の森の守護兵士になりてえな」

「兵士？ 軍か。軍は生まれた身分が低くても出世できるらしいしな……でも、魔の森の守護兵士  
だって？ 王国でも一番の危険地帯じゃないか。またどうして」

兵士になること自体に疑問は無いようだが、望んでいる赴任地が不思議らしく、彼はそう尋ねて  
きた。

「親父が、そこで兵士をやってるんだよ」

「親父って……ん？ お前の名前ってジョン・セリアスだったよな？」

そこで、ノールは何かに気付いたかのように言葉を止めた。

「ああ」

頷く俺に、ノールは徐々に目を見開いていき、そして、確認するようにおずおずと言った。

「……もしかしてアレン・セリアスって」

「俺の親父だ」

そう答えると、ノールの口は完全に開ききり、ばくばくと空気を求め始めていた。どうやら親父  
の名前は、俺が思っている以上に有名なようだ。

前世の軍にいたときはあんまりそんなこともなかったような気がするが……俺が親父の名前を出  
すより先に、超名門貴族であるケルケイロなんかと仲良くなってしまうから、親父の話は霞かすんで  
しまったのかもしれない。

目を見開いて固まっているノールを放置したまま、俺は闘技場へと足を向ける。が、やはり一瞬  
だけ振り向いて、声をかける。

「おい、ノール。行くぞ」

「……はっ。お、おい！ 待ってくれ！ 俺も行くつての！」

ノールが走って追いかけてきた。

もしかしたら、友達ができたのかもしれない。

そんなことを思った。

### 第3話 魔法実技と悪ふざけ

闘技場は広く、全クラスの生徒が集まっても全く満ちることはない。それもそのはず、時期が来れば、ここでは全校生徒が魔術の実力を存分に披露する魔術大会が開かれるのだ。

余談だが、その際には王国の騎士団や軍など、外部からも人を招き、学院生徒の力を観覧してもらうことになる。この魔術大会で実力を示せたならば、卒業前に騎士団や軍などへの配属が内定することも間々ある。したがって、多くの学院生徒がそれを目的に魔術大会の頂点を目指すのである。そんな広大な闘技場の中で、俺たちはいま、魔法実技の授業を受けている。

俺の所属するクラスである、アチエール楓の魔法実技の担当教官は、いかにも魔術師然とした老人だった。長くゆったりとしたローブを瘦身に纏い、トンガリ帽子を被り、真っ白で立派な髭を伸ばしたその老人は、あのナコルルですら認めるほどの実力を持つ、偉大な魔術師の一人であった。

常人には難しい四大属性全ての扱いをマスターし、マギステル・エレメントム元素使いと呼ばれた彼は、かつての大戦において多大なる戦果を上げ、相手国を震え上がらせた。彼にとっては皆などいい的でしかなく、いくつもの砦が彼の魔法によって文字通り崩壊したというのは有名な話だ。



そんな勇猛な経歴を持つ彼も年をとって丸くなったのか、今はこの学院で教師をしている。魔法学院の教師、特に実技を指導する教師には「教導魔術師」という特殊な資格が必要とされるが、もちろん彼も所持していた。彼が得られないのなら誰にも得られないだろう。

「さて、では始めるかのう」

長い髭を伸ばすようにいじりながら、彼——モラード・ガラクルシアはそう呟いた。

未だ魔力触媒が手に馴染まない眼前の生徒たちを見て、彼は目を細める。

「いやはや、初々しい限りじゃ。諸君、これから諸君には魔法を使ってもらうが、その前に年寄りの忠告じゃ。魔法を、いたずらに使うでないぞ」

彼の授業は、そんな注意から始まった。

いわく、魔法というのは強力な力であり、行使すればたとえ子供であろうと簡単に人を傷つけることができてしまう。しかも、直接その感触が手に残ることがなく、自分が人を傷つけたという自覚を得にくい。だから、魔法で人を傷つけることは恐ろしいことなのだ、しっかりと自分の心に刻みつけなければならぬ——そういう話だった。

「……それができぬ者に、わしは魔法を伝えることなどできぬ。わしは殺人鬼を作りたいわけではないからのう」

少し遠くを見つめるような目でそう言ったモラードは、いったい何を思い出していたのだろう。

かつて敵国から実際に殺人鬼扱いされていた本人の言葉には、生々しさが感じられる。

もしかしたら、彼がこうやって学院で教師をしているのは、過去に自分が行った所業に対する懺悔げなのかもしれないなかった。

前世の戦場で戦い続けて、ふと、自分の手を見たとき。そこは直視できないほど血で真っ赤に汚れていることがある。鮮やかな赤ではない。どす黒く汚らしい赤だ。それを見るたび、思ったものだ。俺は、正しいのだろうか。

目の前の老人も、同じように思ったことがあるのかもしれない。まっすぐに彼の目を見つつ、話を聞けば、彼の心が分かる気がした。彼の心を裏切らぬよう、真剣に授業に取り組もうと思った。

そんな俺の心が伝わったのかは分からないが、モラードはこちらを見て、少し笑った。

「では、忠告はこんなところで終わりにしておこう。皆も、魔法を使いたくてもうずうずしておるのじゃろう？ わしもその気持ちには分かるからの。焦じらすのはここまでじゃ。皆、魔力触媒は持つっておるな？ 忘れてる者はおらんか？」

こう言われて、自分が忘れていることに気付いたある生徒が、慌てて教室に取りに戻ろうとした。しかしモラードは彼を呼び止め、それから自分の魔力触媒を振ると、闘技場の端の方から魔力触媒が飛んできて、その生徒の手に収まった。

「学院の備品じゃ。次からは忘れないように気を付けて、今日のところはそれを使うと良い。触媒は

使えば使うほど馴染むでな、できる限り自分のものを使った方がよいぞ」  
早速新たな教えを授けつつ、モラードはチャーミングな笑顔を見せる。

「では……魔法実技の授業を始める。今日は全員に初級魔法を使ってもらうのが目標じゃ。おそろく、魔法を使うのは初めてという者が大半じゃろうから……まずは、貴族の誰かに手本でも見せてもらうかの」

そう言って、モラードは生徒たちの顔を見比べ始めた。

基本的に魔法は国家の秘匿技術であり、特に攻撃魔法については特例を除いて伝承を禁じられている。だが、貴族は貴族たる権利の一つとして、自らの子息に魔法を伝承することを許されているのだ。これは、他国との戦争の際、貴族は軍を率いて戦うことから、剣技や戦術と並んで、魔法についても小さな頃から学んでいくためである。ゆえに、ある程度の年齢になった貴族はすでに魔法を使えることが多い。だからこそモラードも、貴族に手本を、と言ったのだ。

ちなみにもであるが、貴族には魔力を持つ者が生まれやすく、それは昔から魔術師の血を取り入れ続けた結果ではないかと言われている。実際、強力な魔術師は貴族と婚姻することが多く、その説はおそらく正しいのだろう。

モラードの呼びかけに従い、数人の手が上がる。おそろくそいつらは魔法を行使できる貴族ということなのだろう。魔法を使えない貴族も入れると、<sup>アチエリス</sup>楓に所属する貴族の数は十人前後だった

はずだ。学院全体でも、貴族の生徒はだいたい三分の一くらいだ。

そのうちのひとり、今年度の学院首席、フラー・エルミステールがモラードより指名される。彼も<sup>アチエリス</sup>楓の所属である。さらさらとした金髪に白い肌、青い瞳と、典型的な貴族の容姿だ。立ち居振る舞いもどことなく洗練されていて、気品がある。ただし瞳の輝きが皮肉げで、微笑みも朗らかというよりは何か腹に抱えていそうな感じであるのが、少しだけだけないが。

「ではフラー。お主は魔法が使えるかね」

手を上げた時点で使えるのだろうか、モラードの問いにフラーが答える。

「ええ。基本的なものは父に教わりました。問題ありません」

「では、使ってみせてもらおうかの……まずは、わしが手本を見せよう。お主、属性は？」

「水です」

「では……」静寂で清らかなる水よ、我が要請に応え、今ここに顕現せよ。水<sup>アズア</sup>」

モラードがそう言うと同時に、モラードの持つ杖型の魔力触媒の先端辺りから水色の光がほわりと放たれ、それから空中に浮かぶ水が出現した。

生徒たちは、その様子を興味深そうにじつくりと見つめている。ほとんどの生徒は、初めて目にする、生活魔法とは異なる規模の、まさに魔法というべき現象に面白さを感じているようである。

そんな生徒たちとは正反対に、いかにも鼻白<sup>はなしろ</sup>んだ表情で見ているのが、おそろく魔法をすでに使

える貴族たちだ。その顔は、そんな簡単な魔法などつまらない、と言っているようである。

まあ、今モラードが見せたのは初歩の初歩であるから、その気持ちは分かる。平民の生徒たちも、すでにこの魔法を知っていたのなら、彼らと同じような顔をしたであろう。かく言う俺自身にとってもあまり珍しいものではなく、どちらかと言えば貴族たちの心境に近いものを感じている。それを顔に出さないのは、普通の子供らしさというものを前世で捨ててしまっているからにすぎない。貴族も平民も、子供の性質に変わったところはあまりない。これから成長していくにつれて軋轢あしづきが生じるかもしれないが、なんとかなるだろう。

それからモラードは、魔法で生み出した水をふらふらと様々な場所に飛ばしたりして操った後、空中で霧散させて魔法を終了させた。

水を出したことよりも、そちらの方が驚きで、俺はモラードの技量に感嘆した。すでに完成してしまっている魔法に干渉することはそれほど容易ではない。誰でもやろうと思えばできなくはないが、かなり単純な干渉しかできないのが普通なのだ。

にもかかわらず、モラードはかなり複雑な命令を出現した水に与え、なめらかな挙動を実現していた。これは恐るべき技量の表れである。そのことがわからない生徒たちは、ぼんやりとその様子を見ていた。いずれ自分がある程度魔法を使えるようになったとき、今日のモラードの技術を思い出し、戦慄することになるだろう。あれは、無理だと。

フラーはどうか。彼は、はじめから特に何の感情も顔に出してはいなかった。興味も、またその正反対の退屈さもなく、ただ観察している、といった風情だった。貴族のたしなみとして、自分の感情をあまり表情に出さないようにしているのかもしれない。

それから、モラードはフラーに、魔法を披露するように伝える。

「では、フラー。お主の番じゃ……」

「はい……水よ、現れよ。ここに顕現し、水泡を形作れ、水<sup>アケテ</sup>」

フラーが唱えると、先ほどのモラードと同じように、水色の光が彼の魔力触媒から発せられる。少しずつ水の球体ができ上がっていき、最終的に先ほどのモラードのものより二周り程度小さな水の球体が、空中に浮かぶことになった。

その後、水の球体はモラードの魔法のような挙動を披露することなく、ばん、とはじけるように空気に溶けて消えていった。

それを見て、モラードは拍手をする。

「うむ！ よくできておる。基本を学んだという言葉には相違ないようじゃ。皆、拍手を！」  
そう言われて、フラーが少しだけ顔をほころばせた。

見ていた生徒たちは、今の魔法がどれだけすごいのかよく分かっているようだが、モラードに促されて拍手を始める。



実際、モラードと比べれば稚拙なものにすぎなかっただろう。発動速度も、規模も、魔力効率も、段違いに低い。だが、子供の使う基礎魔法としては十分なレベルに達している。皆、自分で今の魔法を試すことになれば、今の拍手の意味が理解できることだろう。

モラードとフラーの詠唱が異なっていたが、それがこの時代の魔法の特色だ。未来でスタンダードとなるナコルル式魔法に対し、この旧式魔法はまず詠唱が必要であり、その詠唱は個人の想像を象徴するものなので、一人ひとり異なる。最後に唱えた起動語と呼ばれる魔法言語のみが共通する部分である。旧式魔法は、詠唱と起動語を組み合わせて口に出さなければ発動しない。不便なことである。

起動語についてはこの時代も研究は盛んであるが、ナコルル式はこの起動語についての理解を発展させた先にある。だからこそ、ナコルル式は一語のみの詠唱や無詠唱を可能にしているのだ。

ただ、旧式魔法も悪いことばかりではない。詠唱部分は自分の母語で唱えることが可能で、その部分にオリジナリティを出して、魔法自体を改良することも比較的簡易にできるという利点がある。後の世界において旧式魔法は戦闘用の魔法としては放棄されたが、それ以外の場面では必ずしもそうはならなかった。工業用の魔法としてならば、それなりに優秀なのである。

属性ごとに作ったグループに分かれた生徒たちは、モラードから詠唱と起動語の組み合わせを

書いた羊皮紙をもらい、各々魔法の練習を開始した。当然のことながら、属性が異なれば詠唱と起動語も異なる。四大属性を全て扱えるモラードといえど、派生属性や特殊属性の全てを使うことはできない。

モラードがグループごとに練習している生徒たちの間を回り、たまに指導を加える、という形で授業は進行していった。

やがて、事件が起こった。

「……やめ、やめろ！」

一人の生徒が、そんなことを叫ぶのが聞こえた。

見れば、走って逃げるノールを追いかけながら、魔法を唱えている者がいるではないか。たまにいたのである。こんな風に、魔法を悪ふざけに活用しようという輩が。

俺はそれに気付くと同時に、ノールのもとに向かって走り出した。

#### 第4話 魔力切れ

本来、こんなことは授業の責任者であるモラードに収めてもらいたいところだが、モラードは少

し離れた位置にいた。ノールを追いかけている生徒は、今にも魔法を放ちそうである。すぐに助けなければならぬ以上、モラードに期待するのは難しそうだ。だから俺はすぐにノールのもとへと走り、ノールを追いかけている生徒の前に立ちふさがった。

「……なんだよお前。そこをどけよ。それともお前が的になるか？」

案の定、目の前の奴はろくでもないことを言う。見るからに高そうな魔力触媒を持ち、どここなく退廃的な雰囲気そのつは、明らかに貴族の子息である。人を見る視線に侮りあはれというか、蔑みあざむか、そういう色を感じる。

俺は呆れたように言った。

「お前、何を聞いてたんだよ。モラード先生が言っていたら、いたずらに魔法を使うなって。今何をしようとした、お前」

貴族男子は一瞬言葉に詰まったが、すぐに顔を赤くして反論してきた。それは反論とは呼べない、ただの文句だったのだが。

「うるさい！ 平民に何をしようが俺の勝手だろう！ 今すぐそこをどけ。そうしないなら、お前も的にするまでだ！」

「勝手じゃないから言ってるんだろ？ さっきも言ったが、モラード先生はいたずらに魔法を使うなって言ったんだ。お前はそれを破ってる。そのことをよく考えろ」

俺がなんでこんなに根気よく説得するかと言えば、相手が子供だからだ。貴族の子息というのは結構な権威主義者というか、色々頭が凝り固まっている奴が少なくない。だが、所詮子供である。親の背中を見て育った結果、そうなったにすぎない。ちゃんとした環境と教育が与えられれば、まともな方向へと向かって育つのだ。

前世の戦争で、俺はそのことを知った。当たり前だが、前世においては平民も貴族も共に戦争に参戦していたから、交流もあった。ケルケイロについては少し特殊だが、それ以外のいわば一般的な貴族とも関わりがあったのだ。彼らは、戦争当初はそれこそ一生懸命に権力闘争を行い、誰が戦争の主導権を握るだとか、戦争が終わった後のパイの取り合いとか、そういうものに腐心おぼろしていた。

けれど徐々に戦争が激化し、そんなことも言っていられない事態に陥ると、意外にも彼らは真面目に戦い始めた。元々、公平無私な人間として知られていた貴族だけなら驚きはしなかったが、とんでもない性格だと評判だった貴族の中にも、まるで人が変わったかのように真剣に戦う者が現れたのだ。

はじめは疑ったものだ。あれは、何かよからぬことを企んでいるのではないかと。

だが、そうではなかった。彼らは本当に改心していた。そのことがはっきり分かったのは、戦争の最後のほう、もはや貴族も平民もなくなり、周りにいる人間を「戦友」としか言えないような特

殊な関係になってしまったときのことだった。

彼らはそれぞれの口で語った。魔王城突入前の最終キャンプの、天幕の内側で。自分がかつてど  
ういう貴族であり、そして今はどういう人間であるのかを。

もちろん、彼らが一樣に同じ理由で改心したわけではなかった。ただ、方向性は似通っていた。  
つまり苦境に置かれていた彼らを平民が救った、という話だ。それによつて、彼らの価値観は変  
わつたらしい。

加えて、同輩が戦争で次々と命を落としていく中、貴族だろうと平民だろうと、顔なじみが生き  
ていることに安心を覚えたことも、影響しているようだった。

滅びの危機に至り、彼らは身分がどうであろうと、人には何の変わりもないということに納得し  
たのだ。ただし、そうではない貴族は、平民に殺されたり、誰にも助けられずに魔族に滅ぼされ  
りしてしまったので、そもそもそういう貴族はあまり残らなかつたという事情もあつたが。

それでも、人が変わることがあるというのは事実なのだ、今の俺は理解している。

ノールを憎々しげに睨んでいるこの幼い貴族だつて同じことだ。こいつはまだ子供だ、頭も柔軟  
にできているはず。だから今すぐとは言わなくても、こういうことを繰り返しているうちに、改心  
することはあり得る。だからこそ俺は立ちほだかり、そして説得を試みた。

けれど今回のところは、俺の思いが功を奏することはなかつたようだった。

貴族子息は、魔力触媒を差し出し、そして言った。

「……もう知らないからな、お前が悪いんだ。巻け、風よ、吹け、風よ。我が眼前の敵を傷つけ  
よ、風ウィンド」

貴族子息の持つ杖型の魔力触媒から、鎌鼬かまいたちのような風が吹き荒び、俺の身体を傷つけた。俺の  
後ろにいるノールは無事であるが、俺は無事とは言いが難かつた。

正直、何の方策もなくここにいるのだ。こんな場でナコルル式魔法を使うわけにはいかないし、  
旧式魔法は正直得意じゃない。というか、ここ二年は一切練習していないので、まだ使えない。覚  
えないで入学した方が自然に見えるだろう、と思つていたからだ。その選択のせいで、今結構な傷  
を身体に負っているわけだ。

しかも、貴族子息の魔法は中々終わらない。こんなに長時間続く魔法だつたかという気すらして  
きた。彼が使つたのは案の定、初歩的なもので、一瞬の風を引き起こすことを目的とした起動語キョウゴを  
使っているため、そんなに長く持続するようなものではないはずだ。だがもう十数秒は経過してい  
るのに、彼の魔法は止まらない。

おかしいと感じた俺は、目の前にいる貴族子息の表情をよく見つめてみた。

すると、先ほどまで紅潮していたその顔は青くなつており、息も苦しげで、明らかに尋常な様子  
ではない。これは……

「……魔力の制御に失敗してるな、まともに集中できていない……おい、もうやめろ、魔力をそそぎ込むな！」

そう言っつてはみるが、目の前の少年は聞く耳を持たない。

「……うるさい……これ……くらい……げほっ」

言い返す気力もないようで、咳込んだ口元には少し血がにじんでいた。これはかなりまずい。俺の話聞きたくないのか、それとも自分で魔力を止められないのか。おそらくは後者で、反論は単なる減らず口の類なのだろうが……

早く止めなければと、吹き荒ぶ鎌鼬すずこの中、俺は貴族少年に近づこうとした。

「……やれやれ。さすがにこれはまずいのう」

すると、後ろから声が聞こえた。そこには、今の今まで闘技場の端にいたはずのモラー드의姿があった。瘦身のモラードがどれほど急いで走り寄ったとしても、いくらなんでも早すぎる。

そんな俺の疑問を感じたのか、モラードは少し髭をいじりながら答えた。

「この闘技場の中ならどこからでも一瞬で来れるよ、わしは」

「だったらもっと早く来てくれても」

「いや、お主が何かしそだったでこのう。じゃまするのも悪いかと。学院長からも色々言われておつての。ただ、さすがに許容範囲を超えたので、来たまでじゃ。止めるが、文句はないな？」

「当たり前です」

モラードはすぐに何かを唱えて、貴族子息の風を完全に停止させた。早い。口元の動きが全く見えなかった。

この時代の魔法は呪文を唱えなければ発動しない。その前提を受け、できるだけ早く魔法を発動させる手法として、高速詠唱の技術の研究が盛んだ。どれだけ早く呪文を唱えられるか、どうやってそれを実現するか。高位の魔術師は、それこそ一瞬で詠唱を完成させられるレベルだと聞いていたが、それはほんの一部の話で、滅多に見られるものではなかったはず。だが、モラードがその使い手だったらしい。

風が停止すると同時に、貴族子息はゆっくりと崩れ落ちる。

それを抱き留めてから、モラードは授業の中断を宣言し、貴族子息を医務室へ連れていった。

当たり前だが、あの状態の人間を正座させて叱るとか延々と注意するとか、そういうことは流石さすがにできない。彼がある程度復調してから、そういった懲罰が行われるはずだ。

貴族だろうがなんだろうが、学院で何か悪事を行ったならば、何も処罰されないということにはならない。とは言え、年齢が年齢だけにいきなり退学になったりはしないとみられる。もう一度同じようなことがあれば分らないが。

俺は振り返って、おびえるノールに話しかける。

「大丈夫だったか？」

「あ、ああ……わるい。助けてもらって……」

「気にすんな。結局何もしてないしな、俺」

「そんなこと……っていうか、お前も医務室に行けよ。傷だらけだ」

確かに身体中に小さな切り傷がある。医務室に行くほど深い傷はないのだが、一つ一つが地味に痛い。ノールがこうならなくてよかったものだ。

「ほっとけば治ると思うけどな……」

「だめだ。ほら、行くぞ！」

そう言うとノールは俺の腕をひつつかみ、医務室まで引っ張っていった。

## 第5話 幻聴

医務室にはノールを狙った貴族子息もいて、俺たちを憎々しげな目線で睨んでいたが、自業自得としか言いようがない。

彼自身もそれは分かっているのか、俺やノールに睨む以上のことはしてこなかった。教師の目が

あるから、という理由もあつたのかもしれないが、教室に戻っても特に何もなかったことからして、多少は反省しているのかもしれない。

それから昼食を食べに、学院内にある食堂へとやってくると、そこでテッドとカレンに出会った。

「お前何やってんだよ……」

呆れたような声で、出し抜けてテッドからそんなことを言われる。

彼ら二人も別のクラスだったが、食堂でたまたま出会ったらしい。二人とも一人で食堂まで来たというので、もしかして友達ができないのかとさりげなく聞いてみたのだが……

「俺はジョンと違ってその辺はちゃんと心得てるからな。何も問題はない」

「わたしも大丈夫」

こんな風に言われてしまった。

むしろ、俺の隣にいるノールの姿に二人は驚いていた。軽く紹介を済ませ、先ほどの授業であったことの一部始終を俺が話し終えると、テッドが呆れたように言った。

「貴族と余計な揉め事を起こすなって、ここに来る前にあれほど言ってたのはお前だろうが。それを……今後、面倒なことになるんじゃないのか？」

それを言われると辛いところがある。

だがしかし他にやりようが……

「もうすこしうまく立ち回れたような気がしないでもないけど……」

カレンまでこんなことを言う。

実際、何もしなければモラードが止めてくれたのだろうが、俺はモラードの移動速度など知らなかった。見た目は老人のモラードにそこまでの力があるなど、誰が想像しようか。魔術師として強大だとは知っていたが、それは固定砲台として優秀なのだと思っていた。

「二人とも、あんまりジョンを責めないでやってくれよ。俺にとっては命の恩人なんだぜ」

ノールがそう俺を擁護してくれると、テッドたちも彼の言葉には頷いた。

「まあ、助けたこと自体に文句はねえんだけどな」

「そうね。立派なことをしたと思うわ。ただ、その貴族の人がどう思うかは……」

不気味に言葉を切って、カレンは気の毒そうな顔で俺を見た。

往々にして、この手の予感的中するものである。

とはいえこのときの俺はそこまで深く考えず、談笑とご飯を楽しんだのだった。

夕日が校舎を照らし、窓から見える範囲の全てを橙色に染めていた。夕日はどことなく、郷愁と恐れを感じさせる。かつて人間が野原を走り回り、狩りをしていた頃から、夜の訪れを予感させ

る夕暮れは、恐怖の象徴だったに違いない。だから、故郷が恋しくなるのだろう。恐ろしい夜が訪れる前に、家に戻らねばと。

授業が全て終わり、寮に帰っているときのことだった。

時間も時間なので閑散としている中、道の真ん中に突っ立っている三人組が俺の目に入った。

気のせいか、そいつらは俺を見ているように思えた。

足早に横を通り過ぎようとしたが、そのうちの一人が道を塞いできた。どうやら俺に用があるらしい。

「……なんだよ」

「いや、別に？」

別に、ということはないだろう。何か用があるから道を塞いでるんだろうが。そう言ってやりたいた気もしたが、一方でひどく面倒に思えた。こういう奴らはどこにでもいる。軍にだって、なくてはなかつた。

だからとりあえず、用件を切り出されるまで待つ。やがて堪忍袋の尾が切れたとでも言うかのように、一人が怒鳴り出した。

「なんとか言ったらどうなんだ！」

何についてだ。特にお前らと語ることはないのだが、と知っている、一番賢そうに見える奴が

静かに話し出す。

「ベルナルドについてのことだ。今日、魔法実技の授業であいつにちよっかいを出したんだろ？」

「ベルナルド？ ……ああ、あの馬鹿か。ちよっかいを出したかと言われると微妙なところだな。

あいつが俺の友人にちよっかいを出していたから、止めただけだ」

俺の答えに、そいつは疑問符を浮かべる。

「ん？ あいつの話と違うな……それは本当か？」

「嘘ついてどうするよ。クラスの生徒全員が見てたんだぞ。他の奴らにも聞いてみれば分かることだ」

「……そうか。あいつ、嘘を……まあ、それはそれとしてだ。とりあえず、お前には」

そう言って、くい、とそいつは首をしゃくる。同時に、三人組の中で一番大柄な奴が俺の腋わきの下に手を入れて動けないように固定し、さらに最初に怒鳴ったやや小柄な奴が、俺の腹に蹴りを入れてきた。こういうことをやり慣れていそうな印象を受ける、中々体重の乗った蹴りだと言えた。普通の子供になら、相当にきついことだろう。だが、俺にはそれほど痛くはなかった。腹筋は鍛えているしな。子供にあるまじき割れ方をしているくらいなのだ。

ただ、そんなことを感づかせると、また面倒くさいことになる。俺は素直にダメージを受けたふりをして、咳込んでみた。すると俺を押さえていた奴の手が離れたので、地面に座り込んで咳込み

続けた。

そんな俺の様子を、下手人の二人は楽しそうな顔で見つめていたが、賢そうな奴だけは違った。

「……これに懲りたら、貴族に余計なことはするな、平民。一応上下関係つてもものがあるからな。

それを乱すと面倒めんどうなことになる……」

そう言うひるがえと身を翻し、去っていった。

最後の言葉に、俺は首を傾げる。

「……あいつ、もしかして制裁じゃなくて忠告に来たのか……？」

けれど疑問に答えるべき人間は、もうすでにその場からいなくなっていた。

オレンジ色の残光が照らす地面には、夕闇を飛び交うコウモリの影が映っていた。

その後は特に、貴族連中から嫌がらせを受けたりすることはなかった。あの忠告で、とりあえずちやらになつたらしく、俺は至って平凡な生活を送っていた。

ただ、ベルナルドだけは憎々しげな視線で俺を見つめるのをやめなかったが、まあ、それはいい。ナコルルは忙しいらしく、入学から連絡を取れていない。

学院長室の木製の扉には、”学院長出張中”と書かれた札がぶら下がっているから、どこかに行っているのだろう。副院長のセリア女史の姿も見えないので、二人で行っていると予想が立つ。

そのうちに入学から三日が経ち、今日は授業の見学をしていた。

前にも説明したが、必修となる基礎科目以外に選択科目が存在し、どのような授業をとるかは生徒自身の判断次第だ。

今の時間帯はその選択授業の時間であり、新入生たる俺たちは、学院内の様々なところを巡って授業風景を見学して回っている。

かなりバリエーションに富んでいて、治癒・浄化魔法から、召喚術、符術に、呪術などの特殊魔術系、剣術、槍術、格闘術などの武芸系、数学、経済学、法学、生物学、薬学などの学問系まである。見ているだけでおもしろいものだが、どれを選ぶのかと聞かれると難しい。フィルなんかは迷わず学問系をとれるだけとるのだろうなという感じがするが、俺は決めかねていた。

今。目の前で行われているのは召喚術の授業である。

特殊な触媒で描かれた召喚魔法陣を使い、異界の存在や人ならざる力を持つものを喚ぶ——それが召喚術の基本である。魔法陣や魔術師の質によって喚び出せる対象に違いがあり、質が高ければ高いほど、強力な存在を喚び出せる。魔法陣は地面に描かれたものでも、羊皮紙に描かれたものでも、何らかの物に彫り込まれたものでも構わない。

召喚術の授業では基本を教えているため、実習室の床に特殊な塗料で描かれた魔法陣を使用していた。

その魔法陣の前で、生徒たちが教師の指示に従い、様々な存在を喚び出しているのを見ると、なぜか心臓の辺りが熱くなった。

鼓動が激しくなり、身体も熱くなっていく。

——でぐちが、あるね。

声が聞こえた気がして、俺は慌ててその場から遠ざかる。

ここにいてはならない。

ここにいたら、戻ってくる。あいつが。

そんな気がした。

## 第6話 覚める

そのまま何もなければよかったのだ。

少なくとも、きっかけさえなければ、何も起こらなかつたはずだ。

いつかは、力を借りなければならぬ日訪れるにしても、それはできるだけ後にしておきたかった。



けれど、そうはならなかった。  
穏やかになつたと思つていた。

きつともうあの頃のように、心を黒く塗りつぶされることなどないと思つていた。  
けれど、それも間違ひだった。

俺の心はあの頃と変わらず、失つた部分を埋めているのは黒い感情だったのだ。

そのことを、俺は改めて知つた。

知りたくは、なかつたのに。



出張から帰つてきたらしいナコルルが駆けつけたのは、それが起きてから少し経つた後だった。

彼女はそこに広がる光景を見て、目を見開くと、立ち尽くす俺をゆっくりと眺めて、呻くように  
呟いた。

「……ジョン、何があつた？　ここで、一体……」

別に隠す意味はなかつた。もう起こつてしまつたことだ。むしろ、一刻も早く対応を講じる必要がある。

「話すのは構わないが、その前に頼みがある」

「なんじゃ？」

「ソステヌーの……ブルバツハ幻想爵をここに呼んでほしい」

俺の言葉を聞いた途端、ナコルルが焦るように言つた。

「ソステヌーの奴を呼ぶじゃと!?　しかも……幻想爵を。いや、来るはずがない。奴らが来るのは  
研究対象がそこにあるときだけじゃ。ここには……」

「いや、絶対来るさ。手紙でもなんでもいい。言つてやれ。あんたの研究対象との契約者がここに  
いるつてさ」

「馬鹿な……あいつらの研究はほとんど狂気の沙汰に近いようなものばかりじゃぞ。それをお前  
は……」

「別に好きでやつたんじゃない。仕方なかつただけだ。とにかく、呼んでくれ。じゃないと……」

俺は少し離れたところに倒れている三人の少年の姿を目に収めながら、言う。

「ああいうのが、増えるぞ」

その三人のうちの一人は、ノールに魔法を放とうと執拗に追い続けた、ベルナルドという貴族の  
少年だ。他の二人も、名前は知らないが、着ているものや顔立ちから判断して、やはり貴族だろう。  
彼らはいつも顔に張り付けていた退廃的で嫌みな表情を、完全にどこかに取り落としてしまつた

らしい。今はただ、表情も無く、目を見開いて瘻<sup>けいれい</sup>を繰り返しながら、遠くを見つめ、たまに、うああ、と呻き声を上げたりしている。治療師が回復魔法を唱えているが、一向に効果はなく、三人の様子はずっとそのままだ。

死んではない。ただ、精神が壊れてしまっている。そんな感じだった。ナコルルはそんな彼らを見ながら、眉を寄せ、ため息をつく。

「どうすれば人間をあんな状態にできるというんじや……」

「さあな。ともかく、ブルバツハだ。できるだけ早く頼む」

「分かった……わしは今から学院に戻って連絡をつける。なに、ソステヌーの奴らには知り合いも少なくないからの……ここで何があったかは、学院長室で聞こう。ジョン、お前も来るのじや」

ナコルルは介抱に尽力する数人の治療師や魔術師たちに二言三言話すと、学院の方へと歩き出す。

「ともかく、あいつらは、病院に運はせるが……大丈夫なのかのう？」

「死んではないが……そこは保証しかねる。ブルバツハ次第だな」

「本当に何があったんじや……」

「これから話す。とにかく急こう」

学院長室につくと、ナコルルは執務机の上で、猛然と手紙を書き始めた。書くべき内容はもう伝えてあるから、どう書くかはナコルルに任せる。

やがて羽ペンを置いたナコルルは、その手紙を封筒に入れ、さらに魔法陣の形に封蝋をすると、呪文を唱えた。

「遙か遠くに我が声を届ける、あなたは受け取るだろう、スツルス・ステウエントゥス風のささやき」

すると、封筒はぼんやりと薄緑色の光を帯び、消失していった。きつと転送系の魔法だろう。生き物の転移は難しくても、無機物、それも小さなものであれば、ナコルルにはそれほど難しいことではない。

「……すぐ返事が来るといいがのう」

そう呟いて、ナコルルはこちらを見た。

「まあ、その前にお主の話の話を聞くか。ジョン……一体あの場で何があった。誰が、何をして、あやつらはあんなったのじや。話してくれ……」

まるで、開けてはいけない箱に手を触れかけているかのような顔をして、ナコルルは俺にそう言った。

別にそんな大層な話があるわけじゃない。つまらない、本当にただつまらないことが起こっただけだ。

そして俺に少し、堪え性が足りなかったのだ。



俺は家路を急いでいた。いつもと同じように、夕日が照らす中、寮までの道を足早に歩いていた。そんなときだ。あの貴族少年、ベルナルドが現れたのは。

彼は一人ではなく、二人の仲間らしき少年を連れて、俺の前に立ちはだかった。

俺は首を傾げた。俺がこいつに桶突いたことはもう学院内に知れ渡っていたが、そのことに対する制裁もすでに終わっているという認識もまた、周知の事実だったからだ。

だからこそ、俺はあれから貴族に何もされなかったし、俺も貴族に何もしなかった。子供の社会だとて、そういう部分はしっかりと機能していて、信用ができた。

なのに、なぜこいつはここにいる。まるでこれから、俺に何かをしようとしているようではないか。それは、俺たち子供の社会においても許されざる、秩序の攪乱になるのではないか。

けれど、向こうはそんなことは思っていないようだった。

俺の困惑に歪む表情を恐怖の表れと勘違いしたのか、妙になれなれしく、余裕ぶった顔で、ベルナルドは言い放った。

「おい……この間はよくも俺を虚仮にしてくれたな」

分かりやすい負け惜しみだった。

虚仮にしたどころか、むしろ救ってやろうと尽力したというのに、なんて言い草だ。

まあ。彼の前に立ちはだかった行為を、虚仮にした、と受け取るのは理解できる。俺の認識としては、ただルール違反してる奴を止めただけなのだが、こいつには通じないのだろう。

こいつはこいつの世界だけで生きている。俺が何を言おうとも、こいつの世界に影響を及ぼすことはできないのかもしれない。

でも、とりあえず言うだけのこととは言っておきたい。もしかしたらこいつを変える一助になる可能性も、全くないわけではないのだから。

「別に虚仮になんかしてねえよ。むしろお前が魔力を制御できないで死にそうな顔してたから、止めてやったんじゃないかねえか。感謝されこそすれ、こうやって三対一で襲いかかれるようなことは一切してないつもりだぜ。そもそもは、お前が未熟だったのが悪いんだろ？」

少し、言い過ぎだったかもしれない。俺の言葉に顔を赤くしたベルナルドは、「俺は未熟ではない！」と言いながら、杖を俺に向けてくる。

冷静さをかなぐり捨てた今の様子のどこが未熟ではないのか、詳細に説明してほしいものだ。

「顔真っ赤にしやがって……どこからどうみても冷静じゃないじゃないか。そんな奴が自分を未熟

じゃないと言いつ張つても、勘違いとしか言いようがないぜ？　なあ、その二人もそう思うよなあ？」

俺にこう言われた二人は、向こうの味方であるはずなのに何かかわらず、一瞬ベルナルドの顔を見て笑いそうになった。ベルナルドはそんな二人に鋭い視線を飛ばし、黙らせる。バツの悪そうな顔をした二人は慌てて、俺を睨んで黙り込んだ。

「まあ、いい……どうせお前はこれから、俺に泣きながら謝るんだからな」  
急にベルナルドは妙な余裕を見せ、こう言った。

どう考えてもありえない話だったが、自信ありげなベルナルドの様子に奇妙なものを覚えて、俺は首を傾げる。

「……随分と自信満々じゃないか。何か秘策でもあるのか？」

俺がそう言うと、ベルナルドは貴族のくせに品のない笑みを浮かべて、俺に向かって何かを投げた。

俺はそれを掴んで眺めた。そして、自分の表情が強張っていくのを感じた。

「……これは」

それは、確かにカレンが身につけていたネックレスだった。俺たちが生まれた村の特産品の、鮮やかな装飾の施された木製のトップに、丈夫な魔物素材で作った糸を通したものだ。

なぜこんなものをこいつが持っている。

そんな思いを込めて睨みつけると、ベルナルドは言った。

「お前の女のものだろう？　平民。何かされたくないなら、黙って俺についてくるんだな」

そうして、ベルナルドは無言で歩き出した。

俺もまた、無言で奴についていく。断れるはずが、なかった。

## 第7話　よばれるもの

ベルナルドたちが街の中を進んでいく。王都の中央通りは夕方になってもなお、人通りが絶えない。帰宅する人々、店を畳む店主たち、それに今からが仕事時だとばかりに裏通りへと消えていく娼婦たちに、酒場へと向かう荒くれども。

こんなに平和で穏やかな都が、じきに戦火と絶望に彩られ、魔族の住処へと変貌してしまうなど、とても信じられない。

数えきれない数の魔族、蹂躪じゅうりんされる人々、吹き荒ぶすま血の嵐、嵐、嵐。

これほどたくさんの方が住んでいたのに、王都を生きて出ることができたのはその住人のほんの

一部にすぎなかった。

人の命など、一枚の銅貨よりも軽く、その辺の石ころと同じくらいの重さしか持たないのだということを、俺はあるとき知ったのだ。

俺がそんな回想にふけっていると、前を行くベルナルドが一瞬振り返って首を傾げ、余裕を見せつけるような笑みを浮かべた。

「……何か企んでるのか？ 何をしようと無駄だ」

貴族らしい品と、権威主義的な考えの卑しさがにじみ出るその表情は、意外にも妙な魅力に満ちていた。ベルナルドの取り巻き二人は、もしかしたら彼のそんなところに惹かれているのかもしれない。

それにしても、何か企んでいるなどと言われるとは思わなかった。むしろ、何も考えていないに等しい。ベルナルドが何を考えていようとも、俺にはその企みをはねのける力がある。企む必要など無かった。

ベルナルドとて、俺を泣いて謝らせたらしいから、殺す気ではないのだろう。その時点で、こいつの計画は俺にとつてどうでもいいものなのだ。適当にいたづらられて満足してもらい、お帰り願おう、と暢気に考えていた。

しばらく街を歩き、だんだんと奥まったところへと進んでいく。

王都の目抜き通り周辺は美しい町並みが揃っているが、都全体がそのようにまとまっているわけではない。幾百年もの月日を経て増築に増築を重ねてきた街は、あるところを境に途端に色あせたりする。

富める者と貧しき者との格差は、どんなところにもあった。主に後者の人間が住む、日の当たらない寂しい裏通りを、ベルナルドたちと俺は足早に通り過ぎていく。

ベルナルドのような貴族がこんな王都の掃き溜めを知っているということに、俺は意外性を感じた。彼の歩みが早いのは、こういった地域の危険を分かっているからだだろう。

王国の歴史を辿れば、王都市街の発展の歴史は常に貴族のそれと共にあった。現在は貧民街となり果てている地域も、はじめは貴族が住んでいたのだ。徐々に王国の領土が増えるにつれ、貴族はその場所を捨て、郊外に大きな屋敷を構えるようになった。そしてそれまで貴族がいた場所に住み出したのが、王都で成功した商人たちだ。さらに発展に伴って多くの人が流れ込むたびに、手狭となった街は巨大化を繰り返す。貴族たちは人口の密集する中央部を避け、外へ外へと逃げるように屋敷を建てていき、商人もそれを追うように住処を移す。

結果として、王都では中心に行けば行くほど貧民街が多くなり、逆に街の外縁部に行けば行くほど、豪華で巨大な屋敷が増えていく。そして、実はこうした構造が原因となり、いずれ王都は魔族の侵入を許すことになる。

やがて、ベルナルドは一件の廃墟の前で足を止めた。俺が同様に足を止めると、彼は首をしゃくって、中に入るように促した。先に入れということらしい。

俺は黙ってその指示に従う。

埃ほこりつばい屋敷だった。左右対称の二階立てで、大きく湾曲する螺旋階段らせんが一階と二階をつないでいる。至る所に蜘蛛の巣が張っており、床は見渡す限り埃で灰色。外からうっすらと差し込む夕日が、舞い上がった埃を照らしていた。

おんぼろではあるが、造りの確かさから、元は裕福な人間の家だったのだろうと分かる。

しかし今は家のことなどどうでもいい。俺が気になるのは、カレンはどうしたのかということだ。てつきり、ついてくれば会わせてくれるものと思っていたのだが。

「……おい、カレンはどこだ」

試しに訊いてみる。そもそもカレンがそう簡単に捕まるのか、という疑問も感じないではなかった。ただ、ベルナルドは貴族だ。腕の立つ人間を雇って攫さらわせるといふ手段もないではない。

普通は学校の採め事程度でそこまではやらないものだが、ダメな貴族というのはどこまでもダメだ。前世、人類の足を引っ張り続けたどうしようもない貴族の権力争いを見てきて、そう思い知った。

ベルナルドが十年後、そんな貴族になっているのか、それとも更正してまともな人間になっているのかは分からないが、少なくとも今はダメな方に分類されるだろう。

俺の問いに、ベルナルドは笑う。

「ここにはいないな」

「おい、どういうことだ。とりあえずカレンに会わせる。無事じゃないなら俺にだってやりようがあるぞ」

少し脅してみる。実際のところ、ベルナルドを傷つけたら親が出てきて、より面倒なことになるだろう。俺が頼る相手だつてナコルルや親父がいるから、たとえそうなつても手のうちようはあるが、できる限り面倒は避けていきたい。だからこれはあくまで脅しにすぎず、本当に何かしようと思っっているわけではない。カレンが無事ならそれでいい。殴られてやつても構わない。

「……お前の女が無事かどうかは、お前次第だ」

「どういう意味だ？」

「これから俺のすることに逆らわないのなら、無事に帰ってくるだろうと言っているんだ」

「……何をやる気だ？」

「何を？ 簡単なことだ。この間の魔法実技の続きだよ。お前には的になってもらう」

楽しそうにそんなことを言い始めるベルナルド。

肆虐的<sup>しやうてき</sup>、かつ貴族的な笑みである。つまりは俺を痛めつけて満足したい、と。全く予想からはずれないそのつまらない行動に、俺はため息をついて応えた。

「分かった。お前のへっぴょ魔法を黙って受ければいいわけだな？」

俺の言葉が自分をバカにしているものだど気付くと、ベルナルドは激昂した。

「お前……！……まあ、いい。いつまでその余裕が続くのか見物<sup>みぶつ</sup>だな。おい、お前ら」

そう言って、ベルナルドは一緒に歩いてきた取り巻きに指示を出した。

すると、取り巻きのうち一人が大粒の魔石を取り出し、そしてもう一人は杖をこちらに向けた。

「さあ、ジョン。お前はこれから俺たち三人の的だ……泣いて謝るならば許してやらんこともないぞ！ さあ、やれ!!」

ベルナルドの指示を受けて、取り巻きたちは詠唱を始める。すると魔石を持った方の少年の身体を赤い光が覆ったかと思いきや、光は魔石に収束していき、見覚えのある形の魔法陣を刻み出す。

「……召喚魔法陣か！」

少年が魔石を持って使っているのは、明らかに召喚術だった。

少年の詠唱が終わると共に、魔石から流れ出る魔力が空中で形をとっていく。それは、炎の輪郭を持つ、赤い猫だった。

「フエレス<sup>フエレス</sup>デラマ<sup>デラマ</sup>、インチャ<sup>インチャ</sup>カイア<sup>カイア</sup>オ<sup>オ</sup>」

「炎 猫 召喚 “！ ミュー、行け！」

少年の叫びと同時に、ゆらゆらと揺れる炎を纏<sup>まと</sup>った猫が、俺に向かって飛びかかってきた。

あまり大きくはない。せいぜい、そのへんの猫と同程度のサイズだ。だが、炎を纏っているその危険さは、比べるまでもない。

やはり俺のことを殺す気はないようで、致命傷を負わせようというよりは、じわじわと小さな傷を何度もつけることを目的にしているようである。炎の猫はにやあにやあと鳴きながら、俺の身体を何度も焼く。熱い。そして痛い。ただ、命の危険は感じられず、俺はそのまま突っ立っていた。

そうしていると、次に、杖を持った少年が俺に杖を向けた。詠唱を終え、起動<sup>きどう</sup>語を叫ぶ。

「……雷<sup>ライ</sup>の雨<sup>アメ</sup>」

珍しいことに、複合属性の雷だった。しかも初級魔法の中でも上位のものだ。召喚術を使った少年といい、ベルナルドの手下は中々に才能溢れる者たちらしい。前世においてはただの一般兵士でしかなかった俺は、彼らに羨ましいものを感じる。

杖からは幾筋もの雷が放たれ、俺の周囲に落ちた。一筋だけが俺に命中したのは、はじめからそのつもりだったのか、それともたまたまなのか。しかし雷が命中したにもかかわらず、被害は手に激痛<sup>げきつう</sup>が走り、多少の火傷<sup>やけど</sup>を負った程度。おそらく手加減されているからだろう。やはり、殺されることはない<sup>いい</sup>と見ていい。そう思うと、なんとなく安心してくる。痛いのは痛い<sup>いい</sup>が、まあ耐えられないほどじゃない。

## 立ち読みサンプル はここまで

そもそも痛いとか苦しいとか辛いとかそういうのは、前世で多く味わいすぎた。このくらいの痛みに耐えられない忍耐力では、魔王城にたどり着く前に死んでいただろう。だからこの程度の痛みで俺を挫こうとしていることには、正直失笑を禁じ得ない。

しかしそんな内実は、ベルナルドたちには分からない。普通の子供だったなら、これだけ攻撃されれば痛みで泣き叫んでいてもおかしくないところだ。なのに、俺は全くの無反応で、ただ突っ立って攻撃を受け続けている。

とは言え、効いていないわけではないことは、肉の焼けるにおいで奴らにも分かっていたらしい。焦りを感じ始めたのか、攻撃を続けていた取り巻き二人がベルナルドに言い募った。

「お、おい……ベルナルド！ これ以上やるとさすがにやばいんじゃないか」

「あいつぜんぜん痛がらないぜ……なんなんだよ」

こちらを見る目は、もはや奇つ怪な生き物に向けるものに近い。今までも似たようなことを何度もやってきたのだろうが、その中に今の俺のような反応をした人間はいなかったと見える。ベルナルドも例外ではなく、腫の奥では焦りと怯えがない交ぜになったのごとき、奇妙な感情が揺れている。

ただ彼のプライドは、ただ突っ立っているだけの俺に屈することを許さなかった。

「もういい、俺がやる！」と言って取り巻き二人を押し分けると、俺に杖を向けて呪文を唱え出

した。

「ズ突れ風よ、刺せよ風よ、我が眼前の敵を切り刻め！ 風の刃“!!”」

それは、今までの攻撃とは明らかに質が違った。

ベルナルドの風で作られた刃は俺の首を狙って飛んできた。当たれば、いかに俺とて死ぬだろう。未来の知識と力を持つ俺だが、結局のところは普通の人間にすぎない。殺傷力のある攻撃をまともに受ければ簡単に死ぬ。俺の勘は、この魔法を受けると死ぬ、と告げていた。

死なない程度の攻撃なら、甘んじて受けようと思っていた。それくらいで気が済むのなら別にそれでも構わない、と。カレンが無事に済むならそれでいい。

けれど、死ぬことだけは認められない。前世から一貫して、それが俺の最も強い欲望だった。生存本能——多分、俺はそれが人より強いのだ。

どんな環境でも、どんな目にあっても、死ぬことだけはイヤだった——目的を果たすまでは。前世では、その目的を果たしてしまっただけに、一瞬気が抜けて死んでしまっただけだが、今世ではまだ、果たすべき目的を果たしていない。死ぬわけには、絶対にいかなかった。

けれど、先ほどの雷撃の影響か、一瞬身体が強ばった。  
一瞬、ほんの一瞬だ。

だがそれが命取りだった。